

浄信寺通信

平成26年夏号

名古屋市中村区名駅五丁目二〇番三
宗教法人浄信寺収益事業部羽塚孝和
TEL (〇五二) 五六一一・一七三六
頒布価格年 千三百円
(檀信徒会費)

理解と諒解の世界

りようかい

「諒解」の「諒」は当用漢字に含まれていないので公用文書、新聞、雑誌、放送などでは、音読みが同じ「了」を使って、「了解」と表記されているが、いずれも意味は同じです。

現代人の多くが生まれる時も、そして又「いのち」終える時も病院でその生死をむかえるのが普通になっている。身近に人間の誕生・臨終に出逢

えない、命というものが、身近に感じられない時代になっている。特に病院で、脳死の宣告を受けても、家族にとっては、まだ息もしているし、体のぬくもりも感じる人が、いのち終えたとは、なかなか納得できないのが現実ではなからうか。

医師が、心停止・呼吸停止等について、医学的・生物学的な説明をされれば一応納得・理解できる。人間のみならずこの地球上に生きる全ての生物の個体をかたちつくる細胞が全部死んでしまえば、そ

れが死であり最終的には水と炭素に分解されると生物学では説く。しかし、多くの日本人が、そうした生物学的な死を理解できるからと言って、それで終わりとはならない。合理的に、説明できないが、漠然とした感情で、「亡くなった人の魂がどこかにいるような気がする」そうした思いを多くの人が持っているのも又事実なのである。

福岡市在住の作家の片山恭一氏は、こうした人の「死」や「魂」「霊魂」の問題について、哲学者の内山節さんの「理解」と「諒解」という

二つの言葉を引用されて説明されている。「理解」とは論理的、合理的にわかることです。近代哲学でいうところの「認識」に近い。これにたいして【諒解】とは、なんとなくわかるということです。筋道だった説明はできない、仕組みや操作方法はわからないけれど、なんとなく納得できる、受け入れることができる」

片山氏は、「医学的・生物学的な死は、内山さんの言う【理解】できる事柄ではあるが、それで死がわかったかという、全くわかった事にはならない。何か充たされな

平和公園墓参のご案内

日時：8月12日（火）
13日（水）

午前8時頃～午後1時頃

米 日帰りバス研修旅行参加者募集

日時 8月30日（土） 集合7時50分
新幹線口（西口） ビックカメラ前
会費 10000円
行先 奥浜名湖臨済宗方広寺派本山
方広寺 竜ヶ岩洞（鍾乳洞）等
昼食は、館山寺温泉で懐石料理
主催 中村区仏教会
締切 8月18日（月）
お問い合わせ： 浄信寺 561-1736

いものが残ってしまい。未解決なものが残っているように思える。それが、各種のアンケート調査などで来世観を尋ねると、「あの世はある」と答える人の方が、「あの世はない」と答える人よりも多いという結果が出たりする要因である」と述べられている。

こうした死の【りようかい諒解】が起こる為には、「歴史や文化や伝統といった文脈のなかではじめて、死についての【諒解】はなされるのだが、現在の日本の社会は、こうした文脈をことごとく失っている。人の死

については、理解だけでは不十分であり、論理や合理を超えて【諒解】できるものがないと、自分の死も、他人の死も受け入れることができない。現今の社会には、死について【諒解】するための文脈が何もない」そして追い打ちをかけるように、「今日、宗教の言葉はぼくたちに何も訴えかけてきていない」と述べられている。

次いでこうした【諒解】の文脈について、近代以前の日本の社会の事例を例に説明されている。その

キーワードは、民俗学の柳田國男の説く祖霊信仰（亡くなった人の魂は近くの山の峰などにとどまり、先祖として子々孫々の暮らしを見守っていく。そして最終的には、村の自然と融合して、共同体の神となる。Ⅱれいこんしやうかせつ霊魂昇華説）と、自然崇拜が二つの柱であった。祖霊信仰を支えてきたのは、伝統的な「家」であり、村の鎮守に象徴される豊かな自然に恵まれた村落共同体を通じての人と人の交流であり、人間と自然との頻繁な関わりであったと言われるのである。

そして片山氏は、近代合理主義の現代にあつて、伝統的な「家」や村落共同体・自然崩壊を、昔に逆戻りさせる事は出来ない。歴史的必然性かも知れない。孤独な個人の死に対して、どんな意味を与える事ができるのか、謂わば生涯を通して、自分自身の死を【諒解】するための文脈をつくって生きていく必要性を説かれているのである。

片山氏の言われる文脈づくりに、大きく係わってきたのが、真宗の徒からは、目くじらを立てて、迷

信・俗信などと揶揄され排斥されている、日本人が伝統的に伝承してきた各種の民俗信仰・儀礼であった事は間違いないのである。

文化人類学のときまさかず斗鬼正一氏は、「人の一生の節目に行われる、通過儀礼について、人が生まれてから死ぬまでの連続的な生物的变化に対して、社会的地位や役割を順次変えていかねばならない生き方の境界を、明確化し、その境界を越えていく仕掛けが、通過儀礼である」と述べられている。通過儀礼一つをとっても死の【諒解】の為の舞台装置にほかならないのである。

現代人が【生は偶然、死は必然】という言葉すらタンスの奥に仕舞い込

み、縁起が悪いと言う事で、なるべくならば死の事は考えないように生きている。そうした、死を隠蔽する行為を、十七世紀のフランスの思想家パスカルは著書「パンセ」の中で、気晴らしと言う事で目隠しをして生きていると言い切っている。

生きるのがつらいのは何故か？人間とは不幸に運命づけられている。

人間は気晴らしに心を占められる間は、辛さを忘れる。労働も気晴らしである。何からの気晴らしか？

全ては死に対する気晴らしである人間は生まれた瞬間から、死と



捨聖 一遍上人 (一遍聖絵)



現行100円硬貨



生ぜしもひとりなり。死するも
独りなり。されば人々とも
住すれどもひとりなり、そい
すべき人なきゆえなり
とある。

つまりパスカルは、人間の自己
欺瞞的な生き方に警鐘をならし、
人はみな孤独な存在であり、死を
語らない生き方には又生もないと
一遍は言うのである。

日本の仏教学は、明治以降、新し
い学問的方法論・文献学的方法論
などによって著しい発展を遂げた。

即ち仏教は原始仏教から上座部
仏教（小乗仏教）の段階を経て発展
して、お釈迦さん滅後五〇〇年頃、
大乘仏教という形態に到達して、
それが、インドから中国・朝鮮を経
て日本に伝来して、鎌倉新仏教の
祖師達によって、仏教の最高形態
として大きく花開き、見かけ上は
繁栄を誇っている。

こうした学問的成果は、伝統教
団の学者・僧侶にとつては、仏教の
発展と言うキーワードを隠れ蓑に
しての大乘仏教至上主義。あるは
教義至上主義に固持する結果を招
いた。

その結果、現代の教化と言え、宗
祖の言葉・經典の解釈・解説等を学
習して「理解」する事に主眼を置く
教化活動を継承してきたのである。
そこには、儀礼とか、人間の死の命
題や課題に対する問いや答えを用意
してこなかったのである。片山氏の
言う【死の諒解】に何らヒントを与
えてこなかったのである。

「三つ子の魂百まで」という諺
（ことわざ）があるが、親が物心つ
いた子どもに初めてお小遣いを与
える時には、
「百円硬貨の模様は何が刻まれてい
るのか？わかる？」
「桜の花びらが彫られているの」
「大きくなって色々な事を勉強する
とわかると思うのだがネ」
「桜の木には、毎日食べるお米のた
ましいが宿る木と言われているの」
「死んでしまった飼い犬のポチのた
ましいも、どこかで見守ってくれ
ているよ！」
「どこにいるのかな？？」

我が国は、明治以降近代化という
旗印のもと、西欧の価値観をグロー
バルと言う美名のもとに、普遍性を
持っている、無意識に植え付けら
れてしまった日本人が、「あなたの
宗教は何か？」と設問されれば、

こうしたさりげない子どもとの
会話の中から、【諒解】の文脈が出
来ていく可能性がある気がするの
である。

■参考文献

「無宗教・無信心」と答えざるを得な
くなってしまった。なぜ毎年驚異的
な数字（六〇〇〇万人から八〇〇〇
万人）の日本人が、社寺に初詣に行
くのか全く説明がつかない。
「無宗教・無信心」と言われる宗教
心・信仰心を持っていると言わざ
る得ない。言葉を変えれば「諒解」の
信心かも知れないと思うのである。

片山恭一著
「死を見つめ、生をひらく」（NHK
出版新書）
斗鬼正一著
「頭が良くなる文化人類学 「人・社
会・自分」——人類最大の謎を探検
する」（光文社新書）

「海の桂林」と呼ばれるハロン湾



昨年の十月初旬新聞に、ベトナムのボー・グエン・ザップ将軍が老衰のために一〇二歳で死去した記事が目にとまった。故ホー・チ・ミンの片腕として対仏・対米戦争を勝利に導いた英雄。物量や兵器、装備で圧倒的な力を誇る超大国アメリカとの戦争は、短期で終結すると言われたが、予想外の長期戦になり地の利を生かしたゲリラ戦で、勝利したのである。

しかしその代償はベトナム側には一一〇万人の犠牲者が出たのである。(米軍の死者は五万八千人)そのベトナムを今年の冬訪れる機会に恵まれた。

政治・文化の中心の首都ハノイ。旧サイゴンのホーチミンは、近年経済発展いちじるしい日本からも多くの企業が進出している。

ベトナムきつての景勝地世界遺産にも登録されている「海の桂林」と呼ばれるハロン湾。穏やかな海を幻想的な風景を味わいながら天候にも恵まれて半日チャーター船で巡った。

ベトナムに戦禍が途絶えて三十九年戦争記念館を訪れた。一九六三年六月十一日、当時のゴ・ディン・ジエム政権の仏教徒に対す弾圧に抗議するため、米大使館前でベトナム僧侶ティック・クアン・ドック師が焼身自殺した。紅蓮の炎の中でも蓮華坐を続け、絶命するまでその姿を崩さなかった。その衝撃的な映像が、脳裏を過ぎった。ガイドさんが、ベトナムの平均年齢が二十七歳と聞いた時、そこに先の戦争の負の遺産を見た気がした。中国・フランス等の大国に翻弄された国だけあって料理は、絶品でした。又訪れたい国です。

桂 蝶六

(大阪府豊中市出身、昭和三十七年生 落語家)

府立桜塚高等学校卒業 大阪芸術大学芸術学部芸術計画学科中退
昭和五十七年十月 二代目桂春蝶(平成五年年一月四日没)に入門後
昭和五十八年四月毎日ホールにて「桂春蝶独演会」にて初高座。
昭和六十三年 毎日放送「落語家新人コンクール」優勝。
平成五年から二十年間ほど、狂言師安東伸元に師事して、落語のみならず、繁昌亭では、狂言を度々演じられている。(狂言名は森五六九)



落語の高座のみならず、『大阪青山大学健康科学部こども教育学科』客員教授。『放送大学』講師『放送芸術学院専門学校』講師。『大阪シナリオ学校』講師等を歴任されて、多くの講座を持たれている。

又アマチュアを対象に、『繁昌亭落語家入門講座』『さやま落語会』等の講師で、落語の実演指導をなされている。

自宅で『愚か塾』主宰されており、愚僧も、生徒の一人として、時折参加しては指導を受けているのではあるのだが、あまり上手くならないのが現実です。

編集後記

心配された台風もそれで、毎日猛暑日です。お体ご自愛下さい。今年の報恩講は蝶六師匠です。日曜日です。是非身近で落語を聞いて下さい多数ご参詣下さい。(住職)

報 恩 講 勤 修

平成24年11月9日(日)

午前10:00~

勤行・説教・おとし

特別ゲスト桂 蝶六(落語家)